

電話会話の終結部に現れる日韓の相違に関する一考察

—日韓の20代の親しい友人同士の電話会話から—

林 美善

要 旨

本研究では、日本語と韓国語における電話会話の終結部がどのような過程を経て終了されるかを調べるために、日韓の20代の友達同士の電話会話40件を分析し、そこに現れた日韓の相違を考察した。その結果、以下のようなことが明らかになった。1) 「pre-closing」：日韓それぞれに特徴的なものとして「総括の表現」(日)、「お互いの幸せや健康を祈る/明示的な終結宣言」(韓)が見られた。2) 「closing」：〈人間関係の再確認〉において、「お詫びの表明」(日)、「再接触の要求」(韓)がそれぞれ特徴的なものとして観察された。〈最終発話交換〉において、韓国語の「어-[o:]」、「응-[u:ng]」が終結部を終了させる機能があること、「어-[o:]」は必ず「응-[u:ng]」の先に立つことが分かった。また、日韓の女性話者の終結部は日韓の男性話者の終結部より長くなる傾向が見られた。

【キーワード】 終結部、pre-closing、closing、人間関係の再確認、最終発話交換

1. はじめに

普段日本人の友人との電話でのやりとりが多い筆者にとって、終結部はいつも難しい問題である。同じ国の友人とは難なくこなしている電話会話の終結が、日本人の友人との電話会話ではどうもスムーズにいかない。また一端終結が始まっても別れのことが1回では終わらず、次々といろいろな別れのことが続くのには困惑する。レビンソン(1990)で指摘しているように、参加者の中のある一方がまだ話したいことがあるのにもかかわらず終了が始まってはいけないし、また、急ぎすぎや間の抜けた終えんは会話参加者間の付き合いにも気まずい関係を持ちこむおそれがある。

このように終結がコミュニケーションにおいてデリケートな問題である以上、電話会話の終結部で学習者が困難を感じる事が予想される。本研究では、日韓の電話会

話終結部の構成要素を抽出し、日韓対照を行う。更にその結果に基づき、日韓の相違点を考察する。日韓で普段何気なく利用しあっている方法を抜き出し、その相違を明らかにすることにより、韓国人の日本語学習者が日本語母語話者との電話会話の終結において困難を感じる部分を解決できる手がかりが得られると考える。

2. 先行研究と本研究の位置付け

電話会話の終結部に関しては、Schegloff & Sacks (1973)の研究が多くを示唆している。ここでは、会話は一定の手続きを経て終結することが明らかにされている。会話とは「話者交代の地点」が繰り返し起こるものだから、そのままでは永遠に続く可能性を持っている(小野寺1992)。会話の終結の問題について Schegloff & Sacks (以下、S & S)は、「一人の話者の発話の完了が、他の話者の話す機会にはならず、また、それがあある話者の沈黙としても聞かれない地点に会話の参加者が同時に行きつくように組織すること」であると述べている。そこで、S & Sは、終結部を「pre-closing」と「closing」という二つの部分に分け、終結問題の解決を試みている。

S & Sと同じく電話会話を分析したClark & French (1981)は、S & S (1973)が提案する終結部の構造をさらに以下のように三つに分けている。

1. Topic termination (話題終結) : pre-closingの声明とそれに対する応答。
2. 「Leave-taking (いとまごい) : Topic termination (話題終結)に続く部分及び最終最終発話交換を含む部分。
3. Contact termination (接触終結) : 電話を切る音。

彼らが一番注目したのは二番目のLeave-takingである。彼らによれば、Leave-takingの機能は、reaffirmation of acquaintance (人間関係の再確認)である。これは、終結によって起こる会話参加者の社会的接触の断絶が一時的なものであり、近いうちにお互いの社会的接触が再開されるということを確認し合う過程である。本研究では、Clark & Frenchに基づいてreaffirmation of acquaintance (人間関係の再確認)を終結部の構成要素に含める。詳細は、3.2で述べる。

上に述べた研究成果に基づいて、日本語と英語における終結部の対照研究を行っているものに岡本(1990)と小野寺(1992)等がある。岡本は、Clark & French (1981)による終結部の構成要素をもとに、電話会話の終結部を二つに分け、それぞれの構成要素の抽出を試みている。さらに、小野寺は、エスノメソドロジーによる電話会話の研

究と日本語の実際の電話会話の終結部を分析し、アメリカ英語の場合、ポジティブな丁寧さを実現したものが多く現れる(例:互いの喜びの表現、互いのための祈り等)のに対し、日本語の場合、ネガティブな丁寧さを実現したものが多く現れる(例:謝り)と述べ、両方の文化的な相違を指摘している(小野寺1992)。

韓国語における電話会話の終結部に関する研究には、金(1998)がある。金は、主に主要部と終結部の間に関連性に焦点を当てて論じており、終結部を独立した「部分」としてとらえた上での構成要素の抽出は行っていない。これまでの終結部研究を概観すると、被験者の数が少ない、年齢、性別などがそろえられていないことが問題点として指摘できるが、本研究においては、被験者を日韓の20代の男女にそろえて、計80人が関わった40件の電話会話の終結部を分析することとする。また、同性の友人同士の話話を分析するため、男女で見られる違いも考察の範囲に含む。

3. 調査の概要

3.1 対象者

分析資料は、日韓の20代の異なる男女80名が関わった40件の電話会話(同性の親しい友人同士)、約3時間分を文字化したものである。内訳は日本語話者40名(男20・女20)、韓国語話者40名(男20・女20)である。資料の収集は、2000年4月から6月にかけてそれぞれ日本と韓国で行った。録音資料を文字化するにあたって、ザトラウスキー(1993)、岡本・吉野(1997)を参考にし、以下に示す方法を用いた。

// 重なり発話開始箇所 - 伸ばされた音節 { } 非言語的な行動 (笑いやため息など)
? 疑問符及び上昇のイントネーション ○○ 人名
C=電話のかけ手 R=電話の受け手 IC=発話番号
JW = 日本人女性話者 JM=日本人男性話者 KW=韓国女性話者 KM=韓国男性話者

3.2 分析の枠組み

本研究では、Schegloff&Sacks(1973)とClark&French(1981)を参考にし、電話会話が自然に終結するための構成として、Closing Section(以下、終結部)を「pre-closing」と「closing」という二つの部分に分けて考える。「pre-closing」は、会話の参加者の一方が「もうこれ以上話すことがない」との声明(pre-closing statement)を出し、もう一方がそれに同意する部分であり、「closing」は、「pre-closing」への声明に同意が得られた時に、参加者が<人間関係の再確認>及び<最終発話交換>を行

い、電話会話が終了する部分である。先述の通り、〈人間関係の再確認〉は、会話参加者の社会的接触の断絶が一時的なものであり、近いうちにお互いの社会的な接触が再開されるということを確認し合う過程である(Clark&French1981)。【会話例1】に終結部の具体例を示す。

【会話例1】

1C: まあ、そんなわけ//で。	pre-closingの声明
2R: はい。	pre-closingの声明への同意

..... 【pre-closing section】

3C: はい、じゃー、お疲れさまです。	
4R: どうもありがとう。	人間関係の再確認

5C: どうも。	
6R: はい。	最終発話交換

..... 【closing section】

4. 結果と考察

4.1 結果

まず、今回日韓の電話会話の終結部に現れた「pre-closing」と「closing」の構成要素を、藤原(1998)の分類を参考にして、以下のように下位分類した。

A. 「pre-closing」の構成要素

- 1) 終結を導くあいづち・ディスコースマーカー 例) 「じゃ」/그래[gure]⁽¹⁾
- 2) 終了の注目表示 例) 「わかりました」「わかった」/「알았다(わかった)」
- 3) 総括の表現(日) 例) 「そういうことで」「そんなわけで」
- 4) 会話内容から導き出される行動を確認 例) 「日曜日の夜にーその時に」
- 5) お互いの幸せや健康を祈る(韓) 例) 「어쨌든 건강해라(とにかく元気でね)」
- 6) 終結へのメタメッセージ⁽²⁾を伝える(日) 例) 「明日会いましょう」
- 7) 明示的な終結宣言(韓) 例) 「끊어야겠다(切るね)」「끊어-(切れ-)」
- 8) 感謝の表明 例) 「ありがとう」
- 9) 外部事情を示す。例) 「지금 전화 왔거든(今、電話きてるの)」
- 10) 発話レベルをシフトする。(日) 例) 「4時に、図書館に行きます」

B. 「closing」の構成要素(〈人間関係の再確認〉と〈最終発話交換〉を含む)

〈人間関係の再確認〉

- 1) 再接触の約束 例) 「またね・また明日ね」 / 「또 연락하자(また連絡しよう)」
- 2) お互いの幸せや健康への祈り 例) 「元気でね」 / 「잘 지내라(元気でね)」
- 3) 儀礼的な決まり文句 例) 「お疲れさまです」 / 「쉬어라(休んで)」
- 4) 感謝の表明 例) 「ありがとう」 / 「고맙다(ありがとう)」
- 5) お詫びの表明(日) 例) 「ごめんね」 「失礼しました」
- 6) 再接触の要求(韓) 例) 「너도 전화 해(あなたも電話して-)」

〈最終発話交換〉

- 7) 別れの挨拶 例) 「バイバイ」 「じゃーね」 / 「안녕(安寧)」
- 8) 別れの挨拶以外で会話を終わらせる。

例) 「はーい」 / 「어-[o:]」 「응-[u:ng]」⁽¹⁾

4.1.1 「pre-closing」の構成要素

以下では多く現れたものから順番に考察していく。最初に「pre-closing」の構成要素として、終結部を開始する談話標識「じゃ(日)/그래[gure](韓)」が多く現れた(日本語:7件、韓国語:12件)。

韓国語の話し言葉における「그래[gure]」は、単独でも、文中でも頻繁に使われ、その機能も意味的役割も多様である。「그래[gure]」の主な機能としては、応答語としての機能があげられるが、その他に、相づちの機能、発話者自身の感動、自分の発話に対する納得、反問、同意要求、問いただし、話題転換の機能として使われることがある(金1992:21)。

「그래[gure]」の談話転換機能について、イ(1996)は「『그래』の談話転換機能は電話会話を締めくくる状況でよく現れる。即ち、「그래」を発話することによって話者はその間電話で十分な話題が取り上げられたと判断して新しい話題、即ち、電話を締めくくる発話が続くことを聞き手に知らせるのである」と述べている。本研究のデータにおいても韓国語話者の「pre-closing」の開始において、話題転換機能を持つ그래[gure]が多く観察され、イを支持する結果が得られた。また、日韓ともに終了の注目表示(ザトラウスキ-1993)「わかりました・分かった/알았다(알았어)」が多く観察された(日本語:5件、韓国語:8件(그래[gure]との組み合わせを含む))。

二番目に、「pre-closing」の構成要素として「総括の表現」(ex. そういうことで)は、日本語には現れるが、韓国語には観察されない。一方、「お互いの幸せや健康を祈る」は韓国語では現れるが、日本語では観察されない。以下に示す韓国人女性話者の【会話例2】では「pre-closing」を開始する方略として「お互いの幸せや健康への

193C: うん。

201C: おやすみ//なさーい。

194R: うん。ではー

↗

202R: おやすみー。

……… **【closing section】**

【会話例3】ではRによって「pre-closing」の声明が行われている。188Rの終結へのメタメッセージを伝える発話に、既に「pre-closing」を試みている189Cが同意を表明し、「pre-closing」を完成している。ここでは188Rが「あした会いましょう」と明言することによって、「今の話はこれで終わりにしたい」という終結へのメタメッセージを伝えていると考えられる。次に、「pre-closing」の声明において、「終結へのメタメッセージを伝える」日本語の例とは異なり、終結を明示的に宣言する韓国語の会話例を見てみよう。以下の【会話例4】にその例を示す。

【会話例4】 ≪終結を明示的に宣言する「切れー」≫ KM-1 (韓国人男性同士)

61R: 끊어- 빠쁘다.

切れー、(おれ、今) 忙しいんだ。

62C: 어-, 알았다.

うん、わかった。

……… **【pre-closing section】**

63R: 응-.

はーい。

64C: 널 보자.

明日会おう。

65R: 응-.

はーい。

……… **【closing section】**

【会話例4】に見るように、61Rの「pre-closing」の声明において「切れー」という終結を明示的に宣言する発話が観察される。韓国語の電話会話の終結部においては「切る」という終結を明示的に宣言する発話が「pre-closing」及び「closing」において頻繁に現れる。特に【会話例4】では、「切れー」という命令形が用いられている。しかし、61RにおいてRは文型から連想される命令的な音調ではなく、ゆったりと説得するような音調で発話しているので、62Cは61Rの「pre-closing」の声明に素直に同意を表明している。

韓国語において、「切る」という終結を明示的に宣言する発話には、끊을게(切るね)、끊는다(切るよ)のように自分の方で切るという意味の終結への宣言も現れるが、【会話例4】においては、끊어- (切れー)のように相手に切ってほしいという命令形

が用いられているのが特徴的だ。最後に、「pre-closing」において、日本語話者の場合、発話レベルをシフトさせる発話が多く観察された。発話レベルシフトというのは、ある発話レベルから他の発話レベルへ移行することである。これは終結への合図として用いられていると考えられる。韓国語話者の場合、日本語に現れるような発話レベルをシフトさせる発話は見られなかった。【会話例5】に日本語話者の「pre-closing」に現れる発話レベルをシフトさせる例を示す。

【会話例5】 ≪発話レベルをシフトさせる≫ (日本人女性同士)

142C: うんうんうん、それはそうだ。頭をちょっとリフレッシュしながらー、
そうか。(1.0) 怖くなってきた。{笑い} 頑張りましょうね。
143R: だろうね。

144C: うーん、あした、じゃーあー、4時に、図書館に行きます。
145R: うん、そうしてください。…………… 【pre-closing section】

146C: はい。それじゃー、またー
147R: うん。

……………一部省略……………

【会話例5】で144Cは「pre-closing」の声明において、「ます」を使用した発話に移行している。145Rも発話レベルをシフトさせている。このように、CとRはお互いに発話レベルをシフトさせることによって、これを終結への合図として用いている。

4.1.2 「closing」の構成要素

今回のデータに見る限り、「closing」の長さに関しては日韓の違いよりむしろ男女の違いが顕著に見られた。「closing」が長くなるのは、〈人間関係の再確認〉の部分が長くなるためである。日韓の女性話者の場合は、次々と〈人間関係の再確認〉の言葉を出し合い、それを何度も繰り返し、「closing」が長くなる傾向がある。それに対し、日韓の男性話者の場合は、〈pre-closing〉が行われた後、「closing」の部分において、〈人間関係の再確認〉のやりとりはあまり現れず、〈最終発話交換〉だけで終わる傾向が見られた。

4.1.2.1 〈人間関係の再確認〉

人間関係の再確認の部分においては、日本語だけに現れるものとして、「お詫びの表明」が、韓国語だけに現れるものとして「再接触の要求」が見られた。

以下にそれぞれの例を示す。次の【会話例6】は、「お詫びの表明」が観察される日本人男性話者同士の会話例である。

【会話例6】 《〈人間関係の再確認〉の構成要素 -お詫びの表明- 》 JM-6

112C: うん、じゃ、とりあえず、そんな感じで。 117R: ごめん// ね。(お詫びの表明)

113R: わかったわかった、ありがとう。 118C: はい、失礼しました。

----- 【pre-closing section】 (お詫びの表明)

114C: はい、はいはい// 119R: じゃー//ね。

115R: うん。 120C: じゃーね。

116C: どうも。(感謝の表明) ↗ 121R: パイ// パーイ。

122C: パイパーイ。

----- 【closing section】

次に示す【会話例7】は、Cによって「再接触の約束」(188C)が行われ、また同じくCによって「再接触の要求」(190C)が続く韓国語話者の会話例である。

【会話例7】 《〈人間関係の再確認〉の構成要素 -再接触の要求- 》 KW-4

180C: 어. 오늘은 빨리 끊어야겠다야. うん。今日はー早く切るね。

181R: 그래, 그래. うんうん。 …… 【pre-closing】

…………一部省略…………

188C: 내가 나중에 또 다시 전화하게. また電話するね。 → 「再接触の約束」

189R: 응, 그래. うん, わかった。

190C: 그래, 너도 전화 해- うん, あなたも電話して-

→ 「再接触の要求」

191R: 응, 나도 하게. うん, 私もかける。

192C: 그래- 안녕- はーい, じゃーね。

…………一部省略…………

【会話例7】で、188Cは「再接触の約束」を行い、これからも二人の関係が続くことを確認し、その後、190CにおいてRにも連絡することを求める「再接触の要求」を行っている。日本語においてはこのような「再接触の要求」は見られなかった。

4.1.2.2 <最終発話交換>

<最終発話交換>においては、日本語では「はーい」が、韓国語では「어-[o:]」、「응-[u:ng]」が目すべき構成要素として見られた。いずれもゆっくりと、下向きのイントネーションを伴って発声される。以下に「はーい」と「어-[o:]」、「응-[u:ng]」を中心に日韓の電話会話の終結部に現れる<最終発話交換>の構成要素の詳細を述べる。

日本語においては下降音調を伴った「はーい」が、最終発話交換の第1発話と第2発話のうち、いずれか一方、または、両方の構成要素に含まれるケースが20件中11件見られた。また、最終発話交換の第2発話には、「はーい」の他にも「バイバイ」「お休みなさい」「じゃーね」等、多様な要素が出現する。韓国語においても「안녕」(安寧)等、<最終発話交換>において多様な要素が出現するが、もっとも頻繁に出現する要素として「어-[o:]」、「응-[u:ng]」が見られた。韓国語の「어-[o:]」、「응-[u:ng]」は日本語の「はーい」とは違い、<最終発話交換>の際、少なくとも一方には必ず出現する傾向が見られる。さらに、本研究のデータにみる限り、電話が切られる直前の発話である<最終発話交換>の第2発話には、必ず、「어-[o:]」、「응-[u:ng]」が出現している。<表1>に日韓それぞれの<最終発話交換>の会話例を示す。

表1 日韓の<最終発話交換>

日本語(例)		韓国語(例)	
JW9	JW6	KW8	KW9
113R: はーい。	200C: //バイパーイ。	79R: //어-[o:]	162R: //어-[o:]
114C: じゃーね。	201R: バイパーイ。	80C: 어-[o:]	163C: 응-[u:ng]

ところで、韓国語の「어-[o:]」と「응-[u:ng]」には順序性が見られる。本研究のデータに見る限り、「어-[o:]」は必ず「응-[u:ng]」に先立つ傾向が見られ、<最終発話交換>において「응-[u:ng]」 - 「어-[o:]」の組み合わせは観察されなかった。

表2 <最終発話交換>に現れる韓国語の어-[o:]と응-[u:ng]

第2発話 \ 第1発話	어-[o:]	응-[u:ng]
어-[o:]	4件	×
응-[u:ng]	6件	3件

4.2 考察

まず、日韓の共通点について考察する。日韓ともに終結部を開始するのに談話標識が多く用いられている。岡本・吉野(1997)では、「『じゃ』は、終結への意向を暗示し、移行場所で段階的に終結へと導く談話標識として機能しており、合意の上で協力し合って終結を達成させるために『じゃ』が重要な役割を果たしている」と述べている。この「じゃ」のような機能をもつものとして韓国語においては그래[gure]が多く用いられている。また、終了の注目表示「わかりました・分かった/알았다(알았어)」も日韓ともに終結部を開始する際、多く現れる。韓国人の日本語学習者が日本語の終結部を学習する際、終結部を開始する日本語の「じゃ」と韓国語の「그래[gure]」の対応関係及び終了の注目表示の対応関係を知ることが、日本語の終結部を理解するのに役立つと考えられる。

次に、日韓の相違点の考察に移る。「pre-closing」において、日本語話者の場合、発話レベルをシフトさせる発話が見られる。これは終結への合図として用いられていると考えられる。韓国語話者の場合、日本語に現れるような発話レベルをシフトさせる発話は見られなかった。また、韓国語の場合、終結を明示的に宣言する発話(例: 끊어야겠다(切るね)/끊어- (切れ-))が用いられるため、電話の切り方が冷たいなど、日本語母語話者との電話会話において気まずい関係をもたらすおそれがあると考えられる。

「closing」の〈人間関係の再確認〉において、日本語には現れないものとして、韓国語に「再接触の要求」が観察された。「再接触の約束」は日韓ともに多くみられるが、相手のほうからも連絡するようにと積極的に求める「再接触の要求」は、韓国語の会話終結の特徴であると言えよう。「closing」の〈最終発話交換〉に関しては、本研究で見える限り、電話が切られる直前の発話である〈最終発話交換〉の第2発話において、日本語の場合、「はい」の外にも多様な別れのことばが現れるが、韓国語の場合、必ず、어-[o:] / 응-[u:ng]が出現する。藤原(1997)では、最終発話交換を「別れのあいさつ」(例: バイバイ、じゃあね、おやすみ等)と「別れのあいさつ以外で会話を終わらせる」(例: うい、はい等)の二つに下位分類して、日本語のほとんどの終結部分が「別れのあいさつ」を用いていると述べているが、本研究のすべてのデータにおいて、韓国語の場合、「別れのあいさつ以外で会話を終わらせる」〈最終発話交換〉が行われており、日本語との違いが顕著に見られた。

5. まとめと今後の課題

「pre-closing」の構成要素として日韓ともに現れたものとしては、「談話標識/終了の注目表示/会話内容から導き出される行動を確認する/外部事情を示す/感謝の表明」があり、日韓それぞれに特徴的なものとして「総括の表現(日)/お互いの幸せや健康を祈る(韓)」が見られた。また、日本語の場合、終結へのメタメッセージを伝える発話が見れるのに対し、韓国語の場合には、終結を明示的に宣言する発話が見られる。

「closing」の構成要素として、〈人間関係の再確認〉の場合、日韓ともに現れるものとして、「再接触の約束/お互いの幸せや健康への祈り/儀礼的な決まり文句/感謝の表明」があり、日韓それぞれに特徴的なものとして、「お詫びの表明(日)/再接触の要求(韓)」が観察された。〈最終発話交換〉においては、「バイバイ/じゃね/お休みなさい/「안녕(安寧)/그래(じゃね)/연락해라(連絡して)」等の別れのことが交わされ、一番多く観察されるものとして、「はーい」(日)、「어-[o:] / 응-[u:ng]」(韓)が見られ、これらの形式が終結部を終了させる機能を持つことが明らかになった。

今後の課題として、分析結果をさらに確かなものにするためにデータの量的充実を図るとともに、世代を増やして分析を行う必要がある。また、本研究では日韓の男性話者より日韓の女性話者の方の終結部が長くなる傾向が見られたので、男女間の電話会話を取り上げて分析したらどういった結果が出るのか興味深い。また、韓国語話者のデータには皆無であった発話レベルをシフトさせる発話が日本語話者のデータからは多く観察されることから、日本語母語話者との電話会話で韓国人学習者がどのような談話管理を行っているのかも調べる必要がある。

注

- (1) 音声記号(IPA)ではそれぞれ、[gʷrɛ̃]、[ɔ̃]、[ũŋ]であるが、便宜上これ以降すべて [gure]、[o:]、[u:ng]と表記する。
- (2) メタメッセージとは、発話が伝える文字どおりの内容以上のメッセージのことである(岡本・吉野1997)。ここでは「電話を終わりにしたい」という終結へのメッセージを伝えている。

参考文献

- (1)岡本能里子(1990)「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72 pp. 145-159.
- (2)岡本能里子・吉野文(1997)「電話会話における談話管理－日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析－」『世界の日本語教育』7 pp. 45-59.
- (3)小野寺典子(1992)「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』11巻9号 pp. 26-38. 明治書院
- (4)金敬善(1998)『会話終結部の談話分析－韓日大学生の電話によるやりとりの対照研究－』静岡大学修士論文
- (5)金善姫(1992)「韓国語の談話における「gure」の用法－日本語の「はい」「ええ」と比較して－」『対照研究－談話マーカーについて－』筑波大学 つくば言語文化フォーラム pp. 21-41.
- (6)熊取谷哲夫(1992)「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』11巻9号 pp. 14-25. 明治書院
- (7)ザトラウスキー、ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察－』くろしお出版
- (8)田中望(1982)「「別れ」の言語行動様式－日米比較のために」『言語生活』363 pp. 34-46. 筑摩書房
- (9)藤原智栄美(1998)「電話会話における終結部構造の日米比較」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第2号
- (10)レビンソン、スティーブン(1990)『英語語用論』(安井稔・奥田夏子訳) 研究社
- (11)이 환규(イ ハンギュ)(1996)「한국어 담화 표지어 「그래」의 의미 연구」『담화와 인지』vol. 3 pp. 1-26.
- (12)Clark, H. H. & J. W. French(1981). Telephone goodbyes. *Language in society* 10, pp. 1-19.
- (13)Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica* 8, pp. 289-327.

(お茶の水女子大学大学院)

A study of different ways of ending up phone calls In Korean and Japanese dialogues

LIM Misun

The purpose of this study is to find out in what process Korean and Japanese conversation end up telephone calls. Forty phone calls had made between friends among twenty Japanese and Koreans were used as data in this study. As a result, the following points were found.

- 1) 「pre-closing」: The distinctive differences were [summarization of the calls] (Japan), [bless each other's happiness and health/ the declaration (expression) of ending dialogues] (Korea).
- 2) 「closing」: As closing composing elements in the <reaffirmation of acquaintance>, [expression of the apologies] (Japan), [the request of recontact] (Korea) were collected. As closing composing elements in <terminal exchange>, the Korean expressions for "Good-bye" [o:], [u:ng] seemed to be used quite open in every case and they functioned as closing conversations in the phone calls. Meanwhile, compared with the length of closing conversations, the gender differences tend to be much considerable in both Korean and Japanese languages.

(Graduate School, Ochanomizu University)